

< 論 説 >

国際コミュニケーション・プログラム(英語)

鈴木 利 久

1. はじめに

経済学部「国際コミュニケーション・プログラム(英語)」は経済学や経営学の素養を培うと同時に、英語を駆使して国際社会にはばたく実力を養成するために英語教育と専門教育とを有機的・体系的に編成した科目で、平成14年度に2年生3年生を対象として開設された。

このプログラムの一環として、平成15年度には新たに1年生対象の全学共通科目「英語集中コース(IA・IB)」と経済学部専門科目「国際コミュニケーションIA・IIA」を設け、三位一体の授業を展開した^(註1)。

以下、この「英語集中コース(IA・IB)」と「国際コミュニケーションIA・IIA」の成果について報告する。

2. 授業構成と教材

この新たな科目は授業構成、教科書、辞書、授業方法などについて、ハバロフスク経済法律アカデミー・外国語異文化ビジネス交流学科、アルバータ大学サマー・セミナーの法学部講義、及びブリストル大学社会科学部で実践されている方式を応用して、国際社会に通用する英語運用能力の錬成を目指した^(註2)。

具体的には、聴講を希望した少人数の学生を同一クラスにして月曜日、水曜日、金曜日の週3回授業をするとともに、火曜日、木曜日、土曜日にはNHKラジオ講座「ビジネス英会話」の自主学習を課題とした。その授業構成は月曜の授業をリーディング、水曜を英会話・英作文、金曜はリスニングに充てて、リーディングとリスニングの授業は同一の日本人専任教員が、会話・作文の授業は専任の外国人教員が担当した。

日本人教員担当の授業では、ハバロフスク経済法律アカデミーの授業方式を参考に *Interactions 2-Listening / Speaking* と *Interactions 2-Reading* を教科書として採用し、双方の授業で扱う主題が密接に関連するようにし、同時に授業の進み具合に応じて両者を柔軟に扱った。リスニングの授業では、先ずテキストを見ないで繰り返し聴くこと、その場合、英語の自然な流れに沿って具体的な事実と数字の把握に努めること、次いでテキストを見ながら聴き取った内

容を確認することなどに重点を置いた。リーディングの授業はリスニングのリーディングへの展開として、先ず辞書なしで何度も読んで具体的な概要の把握に努めること、次に辞書を最少限に使いながら把握した内容を確認すること、そしていずれの場合もできるだけ英語の自然な構文・語順のままに、文節に区切りながら読み下していくことを旨とした。

また英語を英語で理解するための手がりとして、授業では辞典は専ら *Longman Dictionary of Contemporary English* を使用することとし、指示や説明にはできるだけ英語を使い、日本語は補助的に用いるように努めた。併せてラジオ講座の自主学習を促すとともに、内容理解を助け、深める目的で、学習内容の確認と語句や表現の解説とを毎回授業への導入として活用したばかりでなく、纏めとして各月の始めには前月のテキストを提出させて、自主学習の状況を点検し、成績に反映させた。

更に、学生たちの英語力をより客観的に判断するために、各学期に1回 TOEIC 試験を受けることとして、その結果を定期試験の結果と併せて成績評価に用いた^(註3)。加えて、ハバロフスク経済法律アカデミーの専任英語教師をゲスト・スピーカーとして招待し、ロシアの教育制度と大学教育に関する特別講義を設けたり、外国からの訪問団や留学生を招待して交流授業を実施したりして、実践活用を提供することに努めた^(註4)。

3. TOEICの成績

3-1 第一期の成績

このコースを聴講した1年生は20名の定員に対して18名で、男子学生14名、女子学生4名であった。これらの学生の内、1名が第一期の途中で姿を消し、他の1名は第二期には聴講しなかった。ここでは残りの16名の受講生が収めた成績^(註5)を、表1に掲げた新潟大学大学教育開発研究センターによる TOEIC 試験の試行結果^(註6)を参照しつつ検証する。

	第一回			第二回		
	総合得点	Listening	Reading	総合得点	Listening	Reading
医学部	573.9	290.9	283	639.1	319.6	319.6
歯学部	—	—	—	510.8	255.5	255.3
人文学部	454.1	245.6	208.6	490.6	262.5	228.1
法学部	427.6	239.3	188.3	463.5	255.3	208.3
農学部	384.6	220.2	164.5	399	221.5	177.5
理学部	380	216	164	404.6	219.1	185.5
経済学部	343.9	176	168	394.5	214.3	180.2
工学部	—	—	—	383.3	211.6	171.7

※学部配列は、第一回の総合得点順。歯学部と工学部は第二回のみ参加。

先ず第一期のTOEIC試験の成績（表2）から検討することにしよう。どのような学生たちがこのコースを選択したのであろうか。これを上の大学教育開発研究センター TOEIC 試行・第一回結果と比較すると、この授業を聴講した学生たちの平均的な成績は経済学部の学生としては比較的良かったことが判る。

クラスの平均点は438.4で、これは自学部の平均点（343.9）ばかりでなく、法学部の平均点（427.6）より高く、人文学部（454.1）に次ぐ成績である。リスニングの成績（225.3）とリーディングの成績（213.1）はほぼ等しくて、リスニングでは法学部（239.3）や人文学部（245.6）に及ばないものの、リーディングでは両学部の平均点（188.3及び208.6）を上回っている。

表2：第一期のTOEIC成績				
順位	成績	Listening	Reading	L-R
1	610	310	300	10
2*	540	275	265	10
3	530	295	235	60
4	480	240	240	0
4*	480	265	215	50
6	460	285	175	110
6	460	230	230	0
8*	445	225	220	5
9*	440	255	185	70
10	430	245	185	60
11*	425	235	190	45
12*	385	210	175	35
13*	375	145	230	-85
14	335	135	200	-65
15*	320	120	200	-80
16	300	135	165	-30
平均	438.4	225.3	213.1	

*は大学教育開発研究のTOEIC試行試験受験者。

但し、個々の学生について客観的に見ると、彼らの英語力が特に優れていたとは言い難い。確かに自学部の平均点に及ばなかった学生は総合点で3名、リスニングで4名、リーディングで1名のみであったが、それは学部の平均点が試行に参加した6学部の中で唯一350点に達しないという為体だったからに他ならない。TOEIC試験は990点満点で、リスニング、リーディングの配点がそれぞれ495点であるが、受講生の中で過半の500点に達した学生はわずか3名であったのに対して、逆に400点に満たない学生が5名いた。

内訳を見ると、リスニングの成績の方が良い学生が多いことが判る。リーディングの成績がリスニングより良かった学生は4名に過ぎない。更に、リスニングで過半の250点を超えた学生

が6名いたのに対し、リーディングでは2名のみであった。一般に日本の大学生はリスニングが不得手であると思われる。その判断自体は誤っていないと思われるが、彼らのリーディング能力は多くの場合それより劣っているのである。

逆にリーディングの得点がリスニングより高い学生は下位の4名で、全て総合点が400点未満、リスニングは150点未満で、リーディングでも1人を除いてクラスの平均点を下回っている。つまり、これらの学生はリーディングの能力が優れていたわけではなく、リスニングの能力がリーディング以上に劣っていたと言わねばならない。

3-2 第二期の成績

次に第二期のTOEIC成績を見てみよう。表3はこのコースを履修した学生たちが大きな成果を収めたことを雄弁に物語っている。大学教育開発研究センターのTOEIC 試行・第二回結果と比較しながら、彼らの挙げた成果を検証しよう。

クラス全体の平均点は507点に達した。第一期の成績と比べるとほぼ70点上昇したことになる。この成績は経済学部の平均点(394.5)を遥かに上回っていることは言うに及ばず、人文学部(490.6)や法学部(463.3)をも凌駕し、歯学部の成績(510.8)に迫っている。試行試験に参加した8学部で平均点が500点を超えたのは医学部と歯学部のみであることを考えると、これは特筆に値しそうだ。

順位	成績	Listening	Reading	L-R
1	715	365	350	15
2	575	365	210	155
3*	570	325	245	80
4	540	275	265	10
5	535	270	265	5
6	525	260	265	-5
7	510	260	250	10
8	500	285	215	70
9	495	290	205	85
10	490	215	275	-60
11	485	265	220	45
11*	485	235	250	-15
13	435	265	170	95
14	430	270	160	110
15	425	270	155	115
16	405	225	180	45
平均	507.5	277.5	230	

*は大学教育開発研究のTOEIC 試行試験受験者。

内訳を見ると、リーディングの平均点は230.0で、医学部の319.6点、歯学部の255.3次に次ぐ成績であった。リスニングの成績（277.5）は更に優れていて、第一期には及ばなかった人文学部（262.5）と法学部（255.3）の成績だけでなく歯学部の平均点（255.5）も凌いでいる。

個々の学生について見ると、500点に達したものが半数の8名に達し、残りの学生も残らず400点を突破した。最優秀の学生（715）は医学部の平均点を大きく超えている。内訳では、リスニングの成績が良い学生が多くて、全員が経済学部の平均点（214.3）を超えた。過半の250点に達しない学生はわずか3名で、医学部の平均点を上回ったものが3名あった。

3-3 成績比較

ここでは、第一期と第二期の成績を様々な角度から比較して、このコースの教育成果を更に分析し、問題点を探ってみたい。

まず、成績の変化を第一期の成績順に並べたのが表4である。当然のことながら、例外的な1名を除いて、全ての学生の成績が向上している^(註7)。一見して明らかなのは、第一期に成績が振わなかった学生の成績が目覚しく伸びていることであろう。一学期の成績が下位8名の内7人が70点以上の伸びを示しており、その内4名は100点以上上昇している。対照的に、上位8名の学生で50点以上伸びたのは成績が急伸した学生1名のみであった。

成 績		増 減		
一期成績	二期成績	合 計	L	R
610	490	-120	-95	-25
540	715	175	90	85
530	575	45	70	-25
480	525	45	20	25
480	495	15	25	-10
460	500	40	0	40
460	485	25	35	-10
445	485	40	10	30
440	510	70	5	65
430	535	105	25	80
425	435	10	30	-20
385	570	185	115	70
375	540	165	130	35
335	425	90	135	-45
320	405	85	105	-20
300	430	130	135	-5

リスニング成績、リーディング成績と総合成績との関係はどうであろうか。次にリスニング及びリーディングの得点の増減という観点から受講生たちの成績変化を検証することにする。表5はリスニング成績の増減順に第一期の成績、第二期の成績などを配列したものである。

成 績		増 減		
一期成績	二期成績	合 計	Listening	Reading
300	430	130	135	-5
335	425	90	135	-45
375	540	165	130	35
385	570	185	115	70
320	405	85	105	-20
540	715	175	90	85
530	575	45	70	-25
460	485	25	35	-10
425	435	10	30	-20
430	535	105	25	80
480	495	15	25	-10
480	525	45	20	25
445	485	40	10	30
440	510	70	5	65
460	500	40	0	40
610	490	-120	-95	-25

この表から判るのは、リスニングについてはほぼ全ての学生の成績が上昇していること、成績の伸びは大きく2つのグループに分かれていることである。興味深いことに、成績が50点以上伸びたのは第一期の成績が300点台の学生と500点を越えた学生で、特に300点台の学生は全員100点以上伸びている。逆に、第一期に400点台だった学生のリスニング成績は伸びが40点未満で、思わしくない。即ち、上に述べたように第一期に振わなかった学生の総合成績が急上昇したのは、劣っていた彼らのリスニングの成績が大幅に向上したからに他ならない。同様に、第一期の成績が上位の学生の多くが伸び悩んでいるのはリスニングの伸びが芳しくないことに原因があると考えられる。

表6はリーディング成績の増減と第一期及び第二期の成績とを比較したものである。この表は一層はっきりした傾向を示している。少なからず面喰ったのは、リーディングでは平均点が17点弱しか伸びず、個々の学生についてみると8名の成績が下降したことである。これは受講生の丁度半数に当る。一年に互るリーディング学習の継続にも拘らず、これらの学生の読解力は本質的に伸びていないと言わざるを得ない。また成績が上昇した学生の伸びも全て100点未満に留まっている。このことはリスニングに比べて、リーディングの能力を伸ばすことは困難であり、時間もかかることを物語っている。

更に顕著なのは、リーディングの得点の増減と第二期の総合成績との連関である。一目瞭然、リーディングの成績が上昇した学生は1人を除いて総合成績が500点に達したのに対して、リーディング成績が下った学生で500点を越えた学生は1名だけである。つまり、リーディング能力の向上が総合点500点に到達するか否かを左右したと言っても過言ではなさそうである。

成 績		増 減		
一期成績	二期成績	合 計	Listening	Reading
540	715	175	90	85
430	535	105	25	80
385	570	185	115	70
440	510	70	5	65
460	500	40	0	40
375	540	165	130	35
445	485	40	10	30
480	525	45	20	25
300	430	130	135	-5
480	495	15	25	-10
460	485	25	35	-10
425	435	10	30	-20
320	405	85	105	-20
610	490	-120	-95	-25
530	575	45	70	-25
335	425	90	135	-45

4. 今後の方向

前節で検討したように、ある程度まで、即ち昨年度の受講生の場合で言えば総合点500点程度までは、リスニングの能力を伸ばすことは比較的容易である。しかし、それ以上になるとリスニングの伸びは鈍くなる。そして、更にリスニング成績を伸ばすためには、リーディングの能力を向上させることが不可欠になる。これは、特に外国語の場合、リスニング能力が実はリーディングの能力に依存しているからであると考えられる^(註8)。

この意味で、受講生の中で最高の成果を収めた学生の成績は意味深いものがある。540点から715点に175点も成績が向上したこの学生の場合、基礎学力が備わっていた上に、英語学習に精力を傾注していることが傍目にも明らかであった。その成績は2回ともリスニングとリーディングの得点がほぼ均等で、それぞれの伸びも等しい。これは、元々この学生がリーディング能力に相応しいリスニング能力を備えていたのであり、またそれぞれの能力の向上が相俟って総合的な英語力が飛躍的に向上したことを示している。

ここから今後目指すべき方向が明らかになる。即ち、徹底的なリスニング訓練の継続は不可欠であるが、リーディングの能力を着実に鍛えることこそが、時間はかかっても、結局は本格的な英語運用能力に繋がるのであり、その為にはリスニングと表裏一体をなす機動的なリーディング^(註9)の訓練をリスニングの訓練と併行して行うことが重要だということである。

このような学習を継続すれば、リスニング能力の劣っていた学生はその大幅な向上が見られるであろうし、同時にリーディング能力の向上と相俟ってリスニングも更に向上するであろう。他方、リーディング能力に応じたリスニング能力を備えていた学生は、リーディング能力に合わせてリスニング能力が伸びることによって、確実に総合力が向上していくことが期待される。

〔註〕

1. 資料1参照。
2. 資料2参照。
3. 但し、所謂「TOEIC対策教材」を用いた受験のための訓練は一切実施していない。TOEIC試験は、飽くまで英語力をより客観的に測るための手段に過ぎないと考えているので、今後ともそのような「受験勉強」をさせる予定はない。
4. 第一回の交流授業は新潟市の国際課と協力して、新潟市を親善訪問したハバロフスク日本センターの日本語研修生11名を招待し、日本の諺と日本文化に関する講義を英語と日本語を併用して実施した。この授業の様子は平成15年6月7日の『新潟日報』（「県都」欄）に写真入りで報道された。
5. 上述のとおり、聴講学生たちは各学期に1度受験した。大学教育開発研究センターが実施した試行試験の対象となった学生はその成績を、それ以外の学生はそれぞれが受験した試験の成績を採用した。受験の時期は学生の自主性に任せたのでばらつきがあるし、問題も同一ではない。その時期は第一期が平成15年5月半ばから7月半ば、第二期は平成15年11月末から平成16年2月半ばであった。
6. 大学教育開発研究センターのTOEIC試行試験は平成15年5月17日と平成16年2月13日に実施された。その概要は『TOEICを用いた英語教育の効果測定』（平成15年度・新潟大学学長裁量経費報告書）などとして報告されているが、表1は英語教育担当者に配布された資料に基づいて独自に集計したものである。
7. 意外なことに、唯一成績が下がったのは第一期の成績が最も優れていた学生であった。通常の授業態度などから考えると、この学生が慢心して努力を怠ったとは考えにくい状況なので、これは全くの謎である。一回目の成績が法外に良かったのか、或いは何らかの理由で二回目に実力を発揮できなかったののだろうか。いずれにしても、人並み以上の学習を継続した学生の成績が100点以上も下がったのには愕然とせざるを得ない。ただ、この学生は第一期にはIPテストを、第二期には正規の公開テストを受験しているので、その差が出ているのかも知れない。
8. リスニングの能力とリーディングの能力との関連について、簡単な例で考えてみよう。例えば、It's a piece of cake. 或いは It's a hot potato. という文を耳にした場合、ごく単純化するとその理解には次の4つの段階があると思われる。
 - ① 単なる「音」としてしか聴き取れない。
 - ② 「イツ・ア・ピース・オヴ・ケイク」「イツ・ア・ホット・ポテイトウ」という「英語」としては判別できるが、意味は解らない。

③ 「イツ・ア・ピース・オヴ・ケイク」「イツ・ア・ホット・ポテイトゥ」という「英文」
として認識でき、「それはケーキです」「それは熱いじゃがいもです」という「基本的な意味」
は解る。

④ 「イツ・ア・ピース・オヴ・ケイク」「イツ・ア・ホット・ポテイトゥ」という「英文」
として判別でき、「それはケーキです」「それは熱いじゃがいもです」という「基本的な意味」
だけでなく、「それは至極簡単だ」「それは厄介な問題だ」という「比喩的な意味」も解る。

この四段階のうち、③の段階へ到達するには、「基本的な意味」を理解するに足るリーディングの
能力が必要であると考えられる。更に④の状態を達成するためには、「比喩的な意味」も知っている
だけのリーディング能力を備えていることが不可欠である。当然のことながら、単なる「聴力」を
「聴解力」たらしめるのはリーディング能力に他ならない。

9. ここで「機動的なリーディング」として目指しているのは、英語を聴き取るのと同じ要領で、で
きるだけ英文の自然な流れに沿って読み下し、文節ごとに具体的な事実と数字とを把握する読解法
である。

ごく単純な例を示すと、My father came to Niigata 20 years ago. という英文の場合、敢えて「私
の父は・来た・新潟へ・20年前」と訳すことでリーディングがリスニングと整合するようにする。
これを繰り返すことによってリスニングとリーディングとが一体化し、両方の能力が相俟って向上
すると思われる。

〔参考教科書〕

- ・ J Tanka, P Most & L Baker : *Interactions 1-Listening/Speaking* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ E Kim & P Hartmann : *Interactions 1-Reading* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ E Kim & D Jack : *Interactions 1-Grammar* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ J Tanka & L Baker : *Interactions 2-Listening/Speaking* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ E Kim & P Hartmann : *Interactions 2-Reading* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ P Werner, J Nelson, K Hyzer & M Church : *Interactions 2-Grammar* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ B Wegmann & M Knezevic : *Mosaic 1-Reading* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ J Hanreddy & E Whatley : *Mosaic 1-Listening/Speaking* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)
- ・ P K Werner & L Spaventa : *Mosaic 1-Grammar* 4th Edition (McGraw-Hill / Contemporary)

〔資料1〕

「経済学部国際コミュニケーション・プログラム（英語）」

International English Communication Programme

- ◎ このプログラムは経済学や経営学の素養を身に付け、英語をコミュニケーションの手段として駆使して国際社会で活躍する人材を養成するため、英語教育と専門教育とを有機的に統合した経済学部固有のコースです。
- ◎ このため英語教員、外国人教員、経済学・経営学分野の専門教員による多角的な授業を一年次から三年次まで継続して履修できるようにしてあります。
- 意欲に満ちた学生に集中訓練を行い、英語文献読解力に加えて、聴解力や討論能力など国際舞台で英語を駆使するための運用能力の養成を目指します。
- 全学共通科目の「英語集中コース（IA・IB）」は定員20名をクラス指定とし、経済学部の「国際コミュニケーションIA・IIA」の履修を義務付けて、「三位一体」の授業を展開します。これらの授業では、欧米で出版された教科書と英々辞典を用います。
- 各学期にTOEICの受験を義務付け、成績判定に活用します。その達成目標は、一年次終了までに650点、二年次終了までに700点、三年次終了までに750点とします。
- プログラム履修の成果はアルバータ大学サマー・セミナーやアルバータ大学及びブリストル大学への短期留学（二年次2期から又は三年次）に参加することによって、更に実り豊かなものになります。

◎ 科目構成

〔1年次1期に受講する授業〕

- ・国際コミュニケーションIA(英語基礎文献講読I)：日本人英語教員による英語文献講読の基礎演習
- ・英語集中コースIA(全学共通科目)：日本人英語教員によるListeningとReadingの授業
- ・英語集中コースIB(全学共通科目)：外国人教師によるOral Communicationと英作文の授業

〔1年次2期に受講する授業〕

- ・国際コミュニケーションIIA(英語基礎文献講読II)：日本人英語教員による英語文献講読の基礎演習
- ・英語集中コースIA(全学共通科目)：日本人英語教員によるListeningとReadingの授業
- ・英語集中コースIB(全学共通科目)：外国人教師によるOral Communicationと英作文の授業

〔2年次1期に受講する授業〕

- ・国際コミュニケーションIB(異文化論講義Ⅰ)：日本人英語教員による異文化論の講義
- ・国際コミュニケーションIC(British Culture and Society)：外国人教師による異文化論の講義
- ・国際コミュニケーションID(Business WritingⅠ)：外国人教師によるBusiness Writingの演習

〔2年次の2期に受講する授業〕

- ・国際コミュニケーションIIB(異文化論講義Ⅱ)：日本人英語教員による異文化論の講義
- ・国際コミュニケーションIIC(American Culture and Society)：外国人教師による異文化論の講義
- ・国際コミュニケーションIID(Business WritingⅡ)：外国人教師によるBusiness Writingの演習

〔3年次1期に受講する授業〕

- ・国際コミュニケーションIE(英語文献講読Ⅰ)：専門分野担当の教員による経済学・経営学の英語文献講読の演習
- ・国際コミュニケーションIIF(Business CommunicationⅠ)：外国人教師によるBusiness Englishの演習
- ・国際コミュニケーションIG(時事英語演習)：日本人英語教員による時事英語講読の演習

〔3年次の2期に受講する授業〕

- ・国際コミュニケーションIIE(英語文献講読Ⅱ)：専門分野担当の教員による経済学・経営学の英語文献講読の演習
- ・国際コミュニケーションIIF(Business CommunicationⅡ)：外国人教師によるBusiness Englishの演習

〔自由参加のアルバータ大学サマー・セミナー（2年次または3年次）〕

- ・国際コミュニケーションH(カナダの言語と社会Ⅰ)
- ・国際コミュニケーションI(カナダの言語と社会Ⅱ)
- ・国際コミュニケーションJ(カナダの言語と社会Ⅲ)

◎ 履修例

1年生1学期	英語基礎文献講読Ⅰ	英語集中コース	英語集中コース
1年生2学期	英語基礎文献講読Ⅱ		
2年生1学期	異文化論講読Ⅰ	British Culture and Society	Business WritingⅠ
夏休み	カナダの言語と社会Ⅰ	カナダの言語と社会Ⅱ	カナダの言語と社会Ⅲ
2年生2学期	異文化論講読Ⅱ	American Culture and Society	Business WritingⅡ
3年生1学期	英語文献講読Ⅰ	Business CommunicationⅠ	時事英語
夏休み	カナダの言語と社会Ⅰ	カナダの言語と社会Ⅱ	カナダの言語と社会Ⅲ
3年生2学期	英語文献講読Ⅱ	Business CommunicationⅡ	

〔資料2〕

「英語集中コース（IA・IB）」について

- ◎ 「英語集中コース」は「国際コミュニケーション・プログラム（英語）」の一環として少人数（定員20名）の学生をクラス指定にして体系的に英語を習得させる新しい試みです。国際社会で英語を駆使して活躍できるように、一年生の時から英語運用能力を本格的に鍛えます。
 - ◎ このコースの授業は「英語IA（集中）」と「英語IB（集中）」を同一クラスで行います。このコースでは英米で出版された教科書と英々辞典を使用します。
 - ◎ このコースを聴講する学生は「国際コミュニケーションIA・IIA」の受講、NHKラジオ講座「ビジネス英会話」の自主学習、年2回のTOEIC受験が義務付けられます。
 - ◎ 一週間の授業構成及び自主学習
 - ・月曜日：「国際コミュニケーションIA・IIA」（鈴木）
Text： *Interactions 2-Reading* (McGraw-Hill)
 - ・火曜日：NHK「ビジネス英会話」（自主学習）
 - ・水曜日：「英語IB（集中）」（M・ショベルトン）
Text： *English Firsthand Gold* (Longman)
 - ・木曜日：NHK「ビジネス英会話」（自主学習）
 - ・金曜日：「英語IA（集中）」（鈴木）
Text： *Interactions 2-Listening / Speaking* (McGraw-Hill)
 - ・土曜日：NHK「ビジネス英会話」（自主学習）
 - 授業はアルバータ大学（カナダ）、ブリストル大学（英国）、ハバロフスク経済法律アカデミー（ロシア）などの授業を参考にして、日本語と英語を併用して行います。
 - 辞書は *Longman Dictionary of Contemporary English* を購入して下さい。
 - 各テキストの学習は授業出席のための課題とし、授業は内容の確認や練習問題、暗誦などを中心に進めます。
 - 自主学習のNHKラジオ講座は学習法を指示し、毎週授業への導入として取上げます。毎月末には学習状況（テキスト）を点検します。
 - 定期試験は課題と自主学習を中心に出题します。
- ◎参考文献
- 小林 薫著『苦手な英語に自信がつく本』（ジャパン・タイムズ）
 - 杉田 敏著『はじめてのビジネス英語』（講談社現代新書）
 - グレゴリー・クラーク著『クラーク先生の英語勉強革命』（ごま書房）

小林氏と杉田氏は、それぞれNHKラジオの『やさしいビジネス英語』とNHKテレビの『英語ビジネス・ワールド』の講師をしていました。G.クラーク先生は元上智大学教授です。

これらの書籍は血の滲む自己鍛錬の結晶で、日本人英語学習者の大半に共通する問題を単刀直入に指摘しています。即ち「外国語学習に対する認識の甘さ」、「持続と量的蓄積の絶対的な不足」、「聞く練習の致命的な欠如」です。以下、内容の一部を紹介します。

- はっきり言って、語学の勉強はとても辛く、厳しいものです。「楽しみながら、知らず知らずのうちに英語が上達できる」などということは、英語学校の宣伝パンフレットか、夢の世界以外にはないと思ってください。(杉田)
- 日本人がある程度、英語をあやつれるようになるには、内外の各種の研究報告を要約すると、最低1,000時間にかかる。ビジネスマンの場合、一日一時間として一年で365時間、三年勉強すれば何とかなるだろう。持続と量的蓄積なしに、いくら近道やノウハウを探しても無理である。(中略)一年間、断続的に思い出したように、せいぜい100時間や200時間積み上げて学習するだけで、要領よくコミュニケーションできる力がつくと考えるのは虫のよい話なのである。(中略)その人の英語体験によっても違いがあるが、何とか理解でき、自分の意思をミニマム表現できて、仕事で英語を使うことができる第一段階として1,000時間という線が浮び上がってくる。一日一時間なら約三年、一日三時間やれば一年で達する時間である。(小林)
- 日本人が勉強してもあまり英語ができない原因は、教育システムのなかの致命的なミスにあります。結果として熱心に勉強すればするほど英語ができなくなってしまうのです。(中略)日本人にはしゃべる能力よりも聞く能力にいちばん欠陥があるということです。(中略)“聞く能力”がないから、“話す能力”もないし、“読む能力”もないということです。(中略)英語に限らず、語学を学ぶおおもとは、“聞く”ことにあります。読んだり、文法を学ぶまえに、先ず“聞く”ことがだいじなのです。(中略)はじめに「聞く練習」をし、つぎに文法とボキャブラリーを学び、そのあとで会話の練習という順です。(クラーク)

これを要約すれば、「英語の勉強は本来辛いもので、仕事で使うレベルに達するには、英検二級程度の力を持っている大学生なら先ず聴くことから始めて、少なくとも1,000時間継続して勉強することが不可欠」ということになります。本当に「我が意を得たり」です。

因みに一回90分の授業に毎週休まず出席して、そのために必ず一時間予習と復習に充てたとしても、授業歴の一年は実質28週ですから「せいぜい60時間断続的に勉強した」ことにしかありません！